令和３年度　第１回伊佐市総合教育会議

１　日時：令和４年３月 17 日（木）10：00～

２　場所：伊佐市役所大口庁舎２階　大会議室

３　出席者：委員【橋本市長、森教育長、永野教育委員、長野（則）委員、久保田教育委員、長野（吉）委員】
事務局：（大塚企画政策課長、下一ノ宮企画政策課政策調整係長、福岡企画政策課政策調整係主査）
関係者：（平崎教育委員会総務課長、竹下学校教育課長、轟木社会教育課長、浅山文化スポーツ課長、
有馬給食センター所長、茶園教育委員会総務課総務係長）

４　議題：教育による地域づくりについて

協議趣旨

教育長：

教育によるまちの活性化を図るために、伊佐市においては「学校教育」、「社会教育」、「スポーツ活動」、「文化・文化財活動」の４本柱がある。この４本柱について説明した後、皆さんのご意見をいただきたい。その後、総合的なご意見をいただきたい。

「学校教育」について

教育長：

「伊佐のふるさと教育の推進」を学校教育では掲げている。学校教育課の中でまちの活性化につながる事柄を絞ったものが「積極的なコミュニティスクールの推進」、「特別支援教育の充実」、「GIGA スクール構想の推進」である。このことについてご意見をいただきたい。

市長：

伊佐市の特徴としてコミュニティスクールがあり、地域と一体となった子育ては、良い制度と思っている。「特別支援教育の充実」とは具体的にはどのようにして充実するのか。

学校教育課長：

平成 29 年度に学習指導要領が、共生社会、インクルーシブ社会という理念に基づき改訂がなされ、子どもたちの特性、実態に応じた、学びを保証するという観点で、通常学級においても特別支援教育を行う流れとなった。国が示している「令和の日本型の学校教育の充実」の実現に向けて、全教員が改めて特別支援教育を深く学び、それぞれの学校教育の現場において、子どもたちの実態に応じた、特別支援教育を行い、特別支援教育は特別支援学級で行うという概念を払拭して、通常学級においても個の特性に応じた教育を行える体制を研修から学び直していく。

教育長：

特別な教育というわけではなく、個に応じた教育を特別支援教育というかたちに、この言葉は変わっていくものだと思う。

市長：

学校訪問時に、授業中に寝てる子どもがいるのに先生が注意をしないことについて非常に残念に思うが、そのあたりに関してはどう思われているか。

学校教育課長：
　残念なことだと思っており、反省すべきところである。これまでの画一的な教師主導の授業から一人ひとりの生徒が興味深く、意欲をもって学べるような授業の改善することと併せ、家庭との連携で、教育相談での生徒との寄り添いを進めていく。子ども自身が夢を持てていない、学ぶ意義を感じられていないことに原因があるのではないかと思っている。

市長：
　先生達が情熱を持って、子ども達に接すれば簡単な問題だと思う。出来る子だけ優遇して、出来ない子は見捨てる風潮があれば、根底から変えるべきだと思う。
　子ども達を何とかしてあげたいという情熱が大事で、諦めずに子どもに関わっていく姿勢があれば、子どもも変わっていくのではないか。子どもは大人が観ていてくれていると分かれば心を開くのではないか。そういうところをみなさんで共有してやっていただきたい。

学校教育課長：
　経験の浅い教員もおり、学習指導、生徒指導の未熟な教員、経験不足の教員もいる。情熱はあるが、どのように関わっていいのかというところを経験で学ぶことも多いため、児童生徒へのアプローチの仕方、保護者との接し方、教員の協働で向かう姿勢といったようなことを含めて研修を行っていく。

委員：
　地域、一般の人達も先生のことを観ているんだということを今の教職員の方々に示すことも研修の中でされると思うが、少しずつ伊佐市の教育の中で出来ることを進めていかなくてはならないのではないか。研修のなかで指導しながら職員の教育を進めていただきたい。

市長：
　結局は、雰囲気づくりだと思うので、一致団結をして教育日本一という同じ方向に向かって言い続けることが大事ではないか。言い続けることで少しずつ変わっていくものだと思う。

委員：
　特にコロナの影響で学校での会合など何もない状況になっている。学校での話が家庭で出ないなど、親子間の連携が出来ていないことも原因のひとつにあるのではないかと私は感じている。

委員：
　コミュニティスクールが大事な部分だと思う。私も学校運営協議会委員をしたが、先生たちが悩んでいる部分で、地域の人でないとその家庭のことが分からない部分もあるので先生方も学校運営協議会を積極的に活かして欲しいと思う。

教育長：
　教師の資質と親が子供を育てられないというような家庭も増えてきているところから複雑に絡みあっている問題が学校現場で生じており、解決しなければならない問題である。

「社会教育」について

教育長：

あいさつでつなぐ生涯学習の推進として「さわやかあいさつ運動の推進」、「地域・学校と連携した家庭教育の推進」、「自ら学ぶ生涯学習の推進」を掲げている。このことについてご意見、ご感想をいただきたい。

市長：

「さわやかあいさつ運動」に参加させていただいているなかで、人数は多くいらっしゃるがあいさつを元気よくしていない様子が見られた。何のためにやっているのか、原点に返ってやっていただくと、良い「あいさつ運動」になっていくと思う。小さい時にあいさつが自然に出来ることが身についていけば、中学校になっても高校になっても必ずあいさつをするようになり、コミュニケーションも取りやすくなると思う。そのような人間教育をするのが教育日本一である。

社会教育課長：

考え方を共有しながらこの事業も含めて進めていきたいと思う。

委員：

私が「さわやかあいさつ運動」をやって良かったと思ったのは、家の前を通る子が、私が背中を向けていても、あいさつをしてくれる。この活動が広まり、この子ども達が大人になった時に、地域がさわやかなまちになるんだと感じた。少しずつではあるが広がっていると感じており、とても良い活動だと思っている。だが、たまには一度、原点に返って何のために、毎月 13 日に「さわやかあいさつ運動」をしているのかを再研修した方が良いと思う。

委員：

あいさつ運動をする大人側は、校区の役員の方々などが来られている場合もあるので苦痛に感じないように無理がないようにしていく必要があると思う。

社会教育課長：

「あいさつでつなぐ生涯学習の推進」については、伊佐市の「さわやかあいさつ運動」は、家庭・学校・地域を中心として安心、安全で住みよいまちづくりと健やかな子ども達の育成を目標に始めた。大人から子どもまでがあいさつで往復することによって、子どもも地域の方々との繋がりができ、地域の方々も自分の創作活動をするにあたっても、自分の作品を子ども達に観て欲しいという、そういった気持ちに繋がっていくのではないかということを主眼においた生涯学習の推進である。

教育長：

先ほどの学校教育の中での問題とも繋がってくるが、家庭教育というのが最近は行き詰ってきている気がしている。このことについてご意見はないか。

市長：

一番にやらないといけないのは家庭教育だと思っている。学校に全部しわ寄せがいき、家庭と学校、先生との関係が上手くいっていないところが最大の問題だ。家庭教育を改善するために、市として真剣に議論し、一歩踏み出さないことには何も変わらない。親の意識を変えるために、例えば、ＰＴＡ活動で研修会を開催したり、そもそもＰＴＡ活動自体が実際に機能しているのかなど、そのようなところを含めて梃入れしていかない

と子どもは救えない。家庭教育を家庭の問題だからとあきらめるのではなく、何か出来ないか、考えていくという姿勢が大事だと思っている。

委員：
　家庭教育については、ＰＴＡ組織が一番大事だと思う。私もＰＴＡ活動を小中高としてきたが、やはり、情熱と楽しさがないことにはＰＴＡも盛り上がっていかなかったと思う。その中でも「おやじの会」という組織が大切だったと思っている。それぞれの学校で問題があったことを、「おやじの会」でどうやって改善したら良いか、焼酎を交えながらいろいろな話題が出て話す場があった。今、そういうような環境がないのではないかと思う。「おやじの会」というＰＴＡ会の組織を今一度、各学校、家庭で考えて盛り上げていければおのずと家庭、学校も素晴らしい環境になっていくのではないかと思う。

「スポーツ活動」について
教育長：
　「スポーツによる伊佐の健幸づくり」、「身近なスポーツ活動による健幸づくり」、「スポーツ交流による健幸づくり」、「スポーツ合宿による地域活性化」についてご意見、ご感想をいただきたい。

文化スポーツ課長：
　市民自らがスポーツを身近に親しむために、今あるスポーツ活動の支援や安心安全に利用できる施設の環境づくりなど場の提供が必要であるということから「身近なスポーツ活動による健幸づくり」を目標とした。「スポーツ交流による健幸づくり」は、「する、みる、ささえる」という多様な関わり方があるが、子どもからお年寄りまで生涯に渡り楽しんでいただく多世代交流を含めた体育祭に代わる市民スポーツ推進月間という取り組みを始めようとしている。プレーヤー、指導者、応援者、ボランティアなど地域の全ての方々がそういう取り組みに参加することによって、無関心な方にも参加を促していく取り組みとしていきながら、市民のみなさんが楽しんでスポーツ活動に取り組んでいこうということで掲げている。

「スポーツ合宿による地域活性化」は、市内の宿泊施設に泊まっていただき、市の公共施設を利用して合宿をしていただくということを目的に補助金制度を創設して、地域経済が潤うようなスポーツ合宿に繋げる目的である。

市長：
　チーム、人が持つノウハウやポテンシャルについて学びに来たいと思うことから、此処へ来たいとなるのではないかと思う。まず、スポーツ合宿といってもチーム自体がないので、そこからの組織づくりをしていく必要があると思う。昔は小学校の運動会でスポーツ少年団が目立つように学校がバックアップしていたので、その姿に憧れて、サッカーをしよう、バレーボールをしようとなっていたが、今の学校現場ではスポーツ少年団が軽んじられているのではないか。スポーツ少年団で親が一緒に活動することで家庭教育にも繋がると思う。小学校の間に適度な運動をしながら、勉強をしていくことでいろんな意味で相乗効果があると思う。スポーツ少年団の加入率が上がっていけば、雰囲気が変わっていくと思う。　小学校からの加入率を上げるために、我々に何ができるか、議論しながら進めていかないと状況は変わらないし、スポーツの活性化は生まれないのではないか。

教育委員会総務課長：
　スポーツ少年団は、学校単位で活動するので部員が少ないと出来なくなる。人数が必要となる団体スポーツ

は、市全体で１チーム作るというようなことも踏まえて検討していかなくてはいけないのかもしれない。また、少年団だけが、団体スポーツをさせるということではない。２つのカヌークラブは少年団には加入はしていないが、相当数な人数が加入している状況がある。その要因が何であるのかを文化スポーツ課で調査し、今後の施策を進めていく必要がある。

市長：
　鹿児島県が少年団という組織を作ったので、そこにこだわりがちな傾向があるが、他県はクラブというのが一般的である。その辺も視野に入れ、学校単位ではなく、市内みんなでやっていくという方向に変えていかないといけないのではないか。

委員：
　カヌーのまちをもっとアピールしたらどうかと思う。せっかく日本一のカヌー艇庫があり、オリンピックの強化選手もいらっしゃったりしているので、市で「カヌーのまち伊佐市」を全面的にアピールしたらどうかと思う。また、カヌークラブも一致団結していくと、もっと全国的にも名が上がっていくのではないかと思うし、やがてはオリンピック選手も輩出できるような環境作りに持っていけるのではないかといつも考えているところである。

委員：
　何かスポーツ日本一というものがあると底上げになるかと思う。そういう意味ではカヌーの日本一は魅力があると思う。カヌーのまちで成功しているのは、会津の喜多方市であるが、喜多方市では子ども達がカヌーを、小さい頃からやっていて、中学校でも、高校でもやるんだという繋がりの部分があり、カヌーのまちという位置づけとなってきている。そのような総合的にまちを挙げてやるというのが良いのかなと思う。そのようなスポーツ振興が出来るような体制作りが必要であるかと思う。とても良いフィールドがあるわけなので活かさない手はないと思う。

市長：
　スポーツ少年団の指導者をしている方々が、体育功労者で表彰されることが無く、全く認められないところを見直さないといけないと思う。ボランティアで指導されている方々を皆さんの前で表彰するような場があれば、指導者もモチベーションが上がっていくのではないかと思う。表彰者を選ぶ際には、いろんなスポーツや、市外の高校に進学していても全国大会に出場している伊佐市出身の子ども達にも注目するような気配りがあって良いのではないかと思う。

教育長：
　スポーツ振興の固定概念を拡げて、全体的な広い目で見ていかなくてはならないということであるかと思う。カヌー場の看板が分かりづらいので、何ケ所かに「カヌーのまち伊佐」という大きな分かりやすい看板があれば良いと思う。

「文化・文化財」について
教育長：
「過去から未来へつなぐ伊佐の文化活動」、「自ら文化芸術活動の推進」、「文化交流活動の推進」、「伊佐の伝統文化の保存・継承」によってまちを活性化しようということについてご意見をいただきたい。

社会教育課長：

コロナの影響で一番危惧しているのが伝統文化の保存と継承である。一部、「湯之尾神舞」、「牛尾棒踊り」団体は活動されているが、他の保存団体は、なかなか活動が思うようにいっていない状況がある。この状況を行政としてどう梃入れしていくのかと考え、発表する場を設けたら良いのではないかと考えた。昨年も計画をしていたが、コロナの影響で出来ず、来年度こそはやろうと職員一同で動いているところである。子ども達が、地域にどういった伝統芸能があるのかと知るきっかけが一番大事だと思うので、過去に撮影した動画があればそれをＤＶＤにして各小学校へ配布して、総合学習の機会などで子ども達に見てもらい、地域の伝統芸能を知ってもらうきっかけづくりとなるような取組みを考えていく必要があると思っている。

文化芸術活動は生涯学習の一環にも繋がり、例えば、絵画、木彫りなどの創作活動も生涯学習に繋がっていくので、地域おこし協力隊などの方々を講師に依頼するなどして活動を普及していけたらと考えている。

文化スポーツ課長：

現在、文化芸術団体は高齢化しており、中間世代の方々が仕事で忙しく、文化芸術活動が出来ていない状況がある。また、子ども達も文化芸術活動に触れる機会が少なくなっている状況もある。伝統的な文化芸術については、まずは、子ども達に教えることにより親御さんも一緒に付いて来ることで、親子一緒に興味を持ってもらおうというような施策を行うことが良いのではないか。これまでも継続して、みやまコンセールの講師を呼んで中学生への楽器指導をしていただいている。この経験によって、高校生になっても大人になっても楽器を続けたいとなるように段階的に活動が拡がっていくのではないか。もう一方では、親子文化教室を開催しており、華道や茶道、着付け等の伝統的な和文化が衰退していくような状況にある。伊佐には立派な先生達がいらっしゃるので、子ども達を夏休みに呼んで、親御さんと一緒にそのような和文化を継承していきたい。行政的な視点と市民が望む視点との乖離がないように施策を検討していきたい。

市長：

「ちむどん」を例に挙げると、コロナ禍であっても、この２年間公演を実施している。コロナがあるから出来なかった部分と何とか開催する方法はないかと進める部分と二通りあると思う。「ちむどん」の場合は情熱を持っていて、何とかして練習を頑張った子ども達にお披露目する機会を与えてやりたいという思いで、感染リスクがありながらも、開催する勇気を持ってやられていると思う。今の世の中の流れとして、コロナ禍であるからイベントは中止するなどイベントを開催することについて検討することもしない雰囲気がある。熱い思いがあるのであれば「ちむどん」が参考になるのではないか。「ちむどん」のイベントの中には必ず郷土芸能を披露する場が取り入れられているので、保存会の方々もモチベーションアップに繋がっていると思う。やはり郷土芸能の公演会や合同発表会というようなイベントを開催すること、まずはやってみるという事が大事であるので、行動を起こしていただきたい。

委員：

文化的な活動をやってみたいと思ってもギターなど個人で出来るものはあるが、文化芸能的なことを新しく習いたいという方もあるかと思う。何があるのか、どこで教えてくれるのか全く分からないので、何か案内を大々的にやっていただくと市民の方々も参加してくださる方も多いのではないかと思う。

文化スポーツ課長：

いろいろな展示会やイベントをしているので情報発信をしていかないといけないと常々感じている。文化協会の加入団体が 50 団体ある。協会に加入していない団体にも様々な活動があり、ふれあいサークルの団体も多数ある。このような団体があるというような情報発信もしていかなくてはならないと感じている。

委員：
　こういうのをやってみたいが、何処かで教えてくれるところがないか、問い合わせ出来るような市の係があればありがたいと思う。

委員：
　以前は、文化の研修や社会教育の研修等、どのようなものがあるかを社会教育課へ行けば開示してくれるような情報をまとめたものがあったかと思う。体制はあるけど、最近はあまりアピールをしていないように感じる。現在も、そのような情報はあるが、活用されていないようなので市民が知らない状況があるのではないかと思う。
　また、現役の地域おこし協力隊が８人いらっしゃるがそれぞれ個性をアピールしている。それももっと市民にＰＲしていくと良いと思う。人形劇をされる隊員もいると聞いている。それも教育関係であるので各学校を廻って欲しいと思う。そのような方々の活動が子ども達に繋げてそれが浸透していくと大人の方々にも知られていくのではないかと思う。意外とまだまだ、知らない方々も多いと思う。

市長：
　伊佐市の地域おこし協力隊が凄く良い活動をされているとのフェイスブックでの投稿があった。その中で、これは受け入れる地域での環境が整っているからそういう活動が出来ているのだろうと凄く高い評価で書かれていた。そのように見てくれている方々があるのでこれを自信にしていかないといけない。先ほど言われたようにもっとＰＲしていくべきだ。

委員：
　そのような地域おこし協力隊の方々の活動を３年間の任期中で終わらすのではなく、繋げていくことが必要だと思う。任期後も伊佐市に定着されている方もいらっしゃるのでありがたいことだなと思う。我々、市民も一緒に盛り上げていくことが大事だと思う。

<u>総合的な意見について</u>
委員：
　少し前の話になるが、ジュニアリーダーの県代表に伊佐市の高校生も選出されて御殿場にある青少年センターへ一緒に行ったことがある。県代表で行くのであるので社会教育の甲子園だと当時、みんな意気込んで行った。その中の一人が大口高校生だったが、自分が大口高校生だということをいろんなところで言わなかった。大口高校だということに自信、誇りを持っていないようであった。自分が学んでいる地域に自信、誇りを持つというのがふるさと教育であって、そういうところが大切であるかと思う。

市長：
　先日、市長・首長研修会に参加した際に、面白い事例を紹介されていた。伊佐市の高校生が卒業して帰ってくる比率は 45%くらい、南さつま市なども同様な数字で、鹿児島市内が 70 数%であった。学力日本一の山形県が一番少ない状況があり、優秀な人間を育てても帰って来ていない状況となっており、鳥取県が 80 数%で県の中で上位であった。小さい頃から郷土教育を徹底しているからプライド、愛着を持って高校を卒業していて、一度都会に出ても郷土に帰ってくる率が高いという事例紹介であった。そのようなことから、都会の人を取り込むのがまちとしての目的なのか、将来帰って来る子たちを育てることが目的なのかを市として、しっかり見定めて施策を行うことが大事だと説明を受け、そのとおりだと感じた。

教育長：

本日は、長時間にわたり、教育に関する問題についていろいろな視点からのご意見をいただき感謝したい。今後、市長と教育委員会と話し合いながら教育の基本となる教育大綱を策定し、その後、新しい教育振興基本計画を作成することとなる。これは、教育大綱と、市の教育振興計画を基本として文科省の例、県教委の例を参考として作成することとなる。

市長：

私は褒められた時よりそうでないことを言われた時が奮起し、結果が良いことが多かった自分の体験から、今日は思ったことを言わせていただいた。この会議が終わったらノーサイドということでお願いしたいと思う。

企画政策課長：

市長、教育長、教育委員の皆様に長時間にわたり貴重なご意見をいただき勉強となった。印象に残った言葉が「繋ぐ」、「思い」、「誇り」という言葉であり、この３つがキーワードとして印象に残った。人と人を繋ぐ、地域を繋ぐ、それから先生方の思い、職員の思い、地域の思いをしっかりと言葉に出して伝えることの大切さ、そして生まれ育ったふるさとに誇りを持つことの大切さというものを改めて感じたことであった。現在、伊佐市の第２次総合振興計画を策定中であるので、いただいたご意見はそちらの方へ反映させていきたいと思う。